

北海道の農業を考える (前)

加藤 勇 太郎

まえがき

最近の農林省発表によると、昭和五十一年度のわが国の食糧総合自給率は七〇%に落ち、穀物自給率は僅に三七%に低下したという。これについて、政治も行政もマスコミも、その事実を認めるだけで、問題の重要性、意味するものを深刻に考えようとしていない。

世間一般の人々の農業についての認識は、農業とは遠い昔から行われているものであるが、工業や商業とはどこか違ったところがあるらしい、という程度であろう。しかも今もつて農業は、なんとなく泥臭い、低級な仕事で、これに従事する農家は貧しい者が多く、農村とともに文化や文明から縁遠い存在、という先入観にとらわれている人が多いようである。

野菜や肉が高騰して家計を脅し、米価問題や米の生産過剰が問題となると、世間の農業への関心が多少高まるかのようにみえるけれど、それは食糧消費者、つまり農産物消費者としての立場からその価格に関心を示すものであって、農業への関心ではない。価格の高騰が落ちつくと、忽ち無関心となる。世間の人々にとって、農業のことは直接痛痒のない、遙か彼方の話に過ぎないのであろう。

戦後のわが国の農政あるいは農業に関する行政は、国の首尾一貫した農業の基本方向を欠いて、いたって場当りであつて、農家農村はもとより、関係の人々の信頼を失いつつある。そして農家農民の多くは、このような農政の影響と、他産業従事者の所得増加に惑わされ、ひたすら農業の商業化、工業化を夢みて自ら農業を破滅に陥れたり、農業を捨てるにいたっている。

このような農業荒廃の根元は、為政者、行政者、農家農民、農業団体、その他農業に関係ある人々がそれぞれの立場で、また世間一般の人々は農産物消費者の立場で、いずれも農業の本義、本質を忘れ、農業を正しく理解し正しく評価しないところに根ざしているのではないかと思われる。

私は、学者でも研究者でもない。ただ今日まで、いろいろな立場で農業に関係をもち、とかく農業が主な役割を占める地域開発、特に北海道の開発に携ってきた経過もあつて、農業問題に深い関心を抱いている一人である。ここに一市井人として、まず、農業をどう理解し、認識し、評価するかという基本について述べ、次いでこの基本的考えに立って、わが国農業の役割りや進路についてふれることとしたい。それらをふまえての、北海道農業の位置づけやその将来については、またの機会をえて述べたいと思つている。

一、農と農業

1. 農とは

農業とはどのようなものなのか。その本質、役割は何か。農業を理解するには、その前に、農とはなんであるかを考えてみよう。

農とは、人間が食糧(作物や家畜による)を生産し、自給しようとする行為であるといえよう。人類発生から現在にいたるまで、どれほどの年代を経たことか定かではない



が、どの時代でも、いつ、いかなる時でも、食糧の確保は忘れることのできない最も重要なことであつたに違いない。人類発生の初期には、自然界にある植物や鳥獣魚介類を採取したり捕獲して食糧にした。その食糧を得るための努力は、すべてに優先して傾注されたことであろう。自然界に豊富にあつた動植物などの食糧資源は、年代を経、人口が増え、つれて次第に豊かさが減り、これを求めるには、かなり遠方まで手を伸ばさなければならなくなり、しかも、必ずしも確実に入手できるとは限らない状況になるにつれ、食糧を不安なく確実に入手するために、食用に適した植物の栽培が始まり、鳥獣の繁殖飼育が行われるようになったのであろう。すなわち、植物の作物化、鳥獣の家畜化であつて、農の起源がここにあることに異論はないであらう。そして農の発生とともに、人間の定住も始まつたと考えてよからう。もつとも、地域、民族によつては、その食糧を主として動物に頼り、家畜の飼料としての草資源を求めて、その家畜とともに移動しながら食糧を得て生活する遊牧民も現われたが、作物の栽培、家畜の飼育のいずれにせよ、農の発生は、人間にとつて一日も欠くことのできない、最も大切な食糧を確実に得るため、身近な手許で、自分の手で生産自給しようという人間の本能によるものであろう。このように農は、人間が食糧を安全確保するため、動植物食糧の生産自給を目的とする営みであり、かつては全人類が農を営んでいたものであろう。

その後、『人類の進化、進歩につれて、農は食料以外の植物の作物化、繊維料、嗜好料、香料、薬用等』や、動物の家畜化―毛用、毛皮用、愛玩用等―に發展したが、農の発生とその本義は、食糧としての植物、動物の生産自給による食糧の確保であり、これが農の基本、原点であることは、今日においても、また将来にわたつても銘記しなければならぬ。

農の発生を契期として、人類の進歩は速度をましたに違いない。この農の発生に人類文化の起源を求めることもできよう。AGRI CULTURE(農、農業)と CULTURE(文化)の言葉から、一層その感を深くすることができるであらう。農は、人類文化の源泉であり、しかも絶えることなく、衰えることなく、今日まで發展をつづけている文化そのものであつて、文化の主流であるともいえるのではあるまいか。

2. 農の本質 農は食糧を生産、自給、確保する営みであるが、その対象となる作物や家畜は生物であり、同じ生物である人間がこれらに接して心情的な絆を

生じ、愛情で結ばれるにいたるものであつて、理屈や計算だけでは割り切れないものがある。また農は、対象生物を複雑な自然の循環の中にそれぞれ位置させ、循環の一つのステップを利用して生産をはかるものであつて、自然界の制約は受けざるをえないけれど、自然循環の法則を損わない限り、永久に生産を繰返すことが可能なのである。

農の起源から今日まで何千年、何万年を経たかわからないが、農の本義や本質はいささかも変らないと思う。現在こそ異様なものが目につくが、終戦までの日本の農家は、その技術において、その経営において、あるいは経済性において、問題はあつたかもしれないが、農の本義、本質を弁え、農に徹していたとみることができると思う。

わが国では水田作中の農家が多いが、彼らは、水田に米を作るほか、裏作に麦を植え、畦畔にはいわゆる畔豆として大、小豆や蚕豆などを蒔き、大豆や麦で味噌、醤油をつくる。手前味噌のたとえのように自慢しあう。蚕豆は煎つて子供らの間食とする。多少の畑と、水田裏作の一部を使って野菜をつくり、各種の漬物を始め、貯蔵のきく乾燥食料までつくる。糯米で饅々餅をつき、小豆で餛を煮てぼたもち、大福餅を蒔く。屋敷廻りには果樹を植え、梅干、干柿、勝栗をつくる。税や野菜の屑などで鶏を飼ひ、新鮮な卵をとる。畑の多い地方では、蕎麦、黍、粟などを植えて、そばを打ち、粟、黍の餅もつく。農家によつては、養蚕をし、繭から糸を紡ぎ、袖を織るし、地方によつては、木綿を手織りにして着物、帯、野良着に仕立てる。この場綿糸だけは買求めるが、自分で綿柄などを工夫して自分で染め、自分で織り上げて、柄の良し悪し、面白さを、女同志で較べて楽しむ。そして米麦などの主作以外のこれらのことは、多くは老人、婦人、子供らがそれぞれの仕事とし、それぞれの楽しみとして農が営まれていたのである。

農とは、食糧を生産し、自給し、確保する営みであると述べたが、彼ら農民は自給するために生産するというよりは、生産することがすべて自給の働きをしている、とみることもできる。まさに彼らは、本能的に農を営んでいるやうに思えるのである。彼らは農を営むことによつて、家族の食糧などを量的、質的に豊かにすると同時に、心のゆとり、豊かさを味わひ、趣味や楽しみを通じて近隣知人との社交、交遊の手だてとしてもいるのであつて、打算による行為ではないのである。農は、その起源はともかく、生産と生活が一体となつた営みであり、その営みそのものが、頗る文化的であるといえる。

昨今、社会、経済の著しい変動と、それに伴う人心の移り変りは、農家をして、農を

営まないものに変えてしまったようにも思われる。小数の鶏さえ飼わぬ農家、自家用野菜すら作らずに、マイカーで農協スーパーまで野菜を買いに行く農家がふえてきているが、これらは農家とはいいい難いと思う。

3. 農業とは 農は、長い年代を経て、人類の文化の発展とともに今日にいたつたのであるが、文化が進むにつれて、人間の中には、自分は農を営まずに専ら農以外の営みをする者が現われてくる。このような人は、農を営んで食糧に余裕のある人から必要とする食糧の供給を受けることとなる。ここで、食糧を生産する人と、自分では生産しないで、他人の生産した食糧に依存する人とに分化する。その結果、食糧を生産し、自己消費以外の余分を、食糧生産をしない人に供給することを業(なりわい)とすることが始まった。これが農業の起源といえるであろう。

農業とは、このように、自分の生産した食糧を他に供給することを業とするものがあるが、生産した食糧を自己消費することなく、いい換えれば、食糧生産者が飢えてまで他に食糧を供給することはありえないことを充分考えておく必要があると考える。

魚を獲ることは漁である。楽しみや、自家用に釣りをすることは漁である。しかし、魚をとつて他に売ることとを業とするならば、それは漁業である。また、鉄をつくることは製鉄であるが、作るだけでは製鉄業ではない。つくった鉄を販売して生計の糧としたり、経営を樹てたり、すなわち業とするならば、それは製鉄業である。

農と農業の関係をこのように整理して理解すると、農業問題を考える場合、大変すっきりとし、また楽になる。いわゆる飯米農家とか、自給農家といわれるものは、農を営んでいるから農家ではあるが、農産物の販売を業としていないわけで、農業ではないし、農業者でもないこととなる。一般世間でも、行政でも、農と農業との区別なしにとらえているところに、農業問題を混乱させている一因があるように思われる。また両者をこのように区別して理解すると、産業としての農業のあるべき姿、進むべき道も、自から考え易くなるのではなからうか。

農と農業の関係からわかるように、農業も、農の本義、本質から外れるものでないことはいうまでもない。農業の役割としては、作物や家畜により食糧を生産し、これを他に供給することが最も重要なことで、この役割は、農業を営む個々の農家にとつても、地方、地域、広くは国家としての農業の場合でも変りはない。ただし、いずれの場合で

も、生産した食糧は優先して自己消費あるいは地元消費に充て、その余剰を他に供給するものであることはいうまでもない。このことは世界的にみても、食糧農産物の、生産量に対する貿易量の割合が非常に少ないことから肯かれるのである。

わが国の昔の大名、小名の国取り合戦は、食糧生産の確保が大きならいであつたし、極高何万石とは、まさに、米を生産確保し得る規模を示したものである。世界的にみても、食糧を確保するための戦いは限りなく沢山ある。同じ日本の一部でありながら、北海道が、長い年月と多大の努力をつづけて、米作零から、今日、日本一の米産地になつたのも、食糧の中でも一番大切な主食の米を手近なところで生産し、確保したいという人間の本能に発した、農の本義によるものであろう。

農業はまた、農の本質に悖るようなことをすれば、当然成立たなくなつてくる。たとえば、輪作すべきところを、目先の利益に惹かれて連作すれば、そのツケはいつか廻ってくる。当面、多量の化学肥料で生産が上つたようでも、真の土地生産力は減退する。短期の経営収支だけでは計り得ないものがある。地力という大切な資産や、乳牛その他、家畜の能力という資産が増える方向にあるのか、減りつつあるのか、営農収支とは別に資産の変動についても注目を要することは、生物を対象とする農業の本質上、留意すべき問題であろう。

以上述べてくると、農業は経済を無視してもよいかのように誤解されるかもしれないが、農業も産業であり、特に行政の援助を少なからず受けていることを思えば、極力コスト低く生産し、なるべく安く食糧を社会に提供すべきことはいうまでもない。ただし農業の本質、本義を弁え、これに悖らぬ範囲において経済的でなければならぬのである。

4. 農業と商工業 同じ産業ではあるが、農業と商工業とは異質の、しかも、かなり趣きを異にしたものである。商業は、相手が人間であり、資金の回転、投資の回収も速い。工業は、技術と資本と労力があれば生産可能で、生産回転が速い。それに較べて農業は、その本質から季節、気候を始めとして、自然界の厳しい制約を受け、これに逆らうことはできない。生産の回転は限られ、急いでも焦つてもどうにもならないし、また、物量や資金でも解決できぬものもあり、商工業的センスでは律しえないのである。農業は、自然そのものの中にとけ込み、自然とともに泣き、笑いながら生物を育

てるところに打算を超えた喜びがある。無生物を取り扱う商工業では味合い難い、心情的豊かさである。

産業革命以来工業の発達は経済を豊かにし、生活、文化を向上させたが、工業と農業の生産性の差は次第に拡大し、本来農業の生産物であったものを、進歩した工業技術で代替品を作るようになってきた。綿糸、麻糸、蚕糸、羊毛などに代る化学繊維やビニール、獣皮に代る合成皮等、ゴムに代る合成ゴムやプラスチック、その他人工甘味料、化学農薬等々があり、人工牛肉さえ作られるにいたった。今後さらにこの傾向は強くなるであろうが、これら代替品の原料の多くは石油系のものであって、環境汚染、自然破壊などにつながる働きがあるほか、資源的に限界がある。

それに較べれば農業は、その特質上生産性は工業に劣るものの、その本質を弁えてこれと取組むならば資源的な心配なく、永久に生産を繰返えしうるものであり、同時に、

その生産活動は、好ましい人為的自然環境を作り出すものなのである。

5. 都市と農村

都市には農村の良さもあれば欠点もある。

本来の農業は、豊かな自然の中に自然を対象として、食糧その他生活に必要ないろいろなものを生産し、その質、量的充足感と、生きた文化そのものを育てる楽しさを味合い、天候や季節の移り変わりとともに憂え、ともに喜んで、連帯性の強い農村社会をつくっていたのである。そして、農業と同じく、農村の生活は、平和で、心身ともに健康に恵まれたものであ

った。

急激な経済発展がもたらした価値観の変化、混乱に、農業はその本質、本義を見失い、商工業の発展に追随して、ただただ現金をもうけることを至上とし、目先の金のためには手段方法を選ばない傾向も出てきて、農業、農村の素朴さ、豊かさ、親しさを失い、農村協同体的な連帯意識も崩れ、農業、農村とも淋れにいたつたのである。その結果、農村人口は流出し、その流出は、農業、農村を更に衰退に導き、互いに因となり、果となりつつ、農村社会を保持することすら困難なところも現われてきたのである。

確かに、都会は農村より就労の機会が多く、生活の便利さの点で勝っているかもしれない。しかし、現金さえ得られるなら、物的に恵まれ生活に便利なら、都会の沙漠の中に生活して、心身とも充ち足りるであろうか。農家、農村の生活は、それほど貧しく、文化に遠く、嫌悪すべきものであるか。都会即文化、経済即善というような錯覚に農村の人々はとりつかれて、自らの生活を卑下することはなかっただろうか。確かに、昔の都市と農村の生活には大きな開きがあったが、事情が変わった現在でも、それを鵜呑みにしている向きが少なくないように思える。今日の農村での生活条件は、道路、自動車、電気、プロパンガス、家電等々、昔日とは比較にならないほど改善されてきている。農業の場である農村は、その豊かな自然と、静かで美しい環境によって、世の人々の精神的、肉体的な安息休養の懐となっている。体を損い、心を傷めた人々は、人間の故郷である農村に帰って、それを癒す。喧騒の中に明け暮れ、自然に飢える都市生活者にとって、農村はリクリエーションの重要な対象である。

農村はまた、いままでの永い間、心身とも健全な多くの人的資源を都会に送りつづけてきた。農村出身者が社会のあらゆる分野に活動し、貢献してきたことはいうまでもない。以前は軍人の大給源であった農村が、戦後は産業要員として莫大な労働力を送り出して、今日の経済繁栄にどれほど寄与したことであろうか。そして、都会に出たものは盆、正月には家族を引きつれて、母なる農村を訪れる。人間にとって農業、農村はまさにその母であり、人類にとって農業はその故郷であるといえよう。都市が繁栄し、他産業が発展すればするほど、農業、農村の重要性は一層重味を増すに違いない。

農村を、明るく、便利で、心身ともに豊かな楽しい生活の場に築き上げるかどうかは農村に生活する人々が、真に農業を理解し、これを正しく評価するかどうかにかかわ

ていると思う。

二、農業の評価

日本農業の現在あるいは将来を考えるにあたっては、農業をどう評価するかが基本になる。日本のような国は外国資源による工業に依存して貿易に頼るはかなく、生産性の低い農業は考える必要はないし、食糧は外国産の安いものを買えばよいとする見方もあるかもしれない。現にその風潮は今日までであった。しかし、農業の評価の前に、農畜産物の食糧の評価をしなければならぬと思う。

日本人の場合、摂取している食糧栄養のうち、水産食糧によるものはカロリーで約40%、蛋白質は二二・四%で、ビタミンその他を考えても、食糧すなわち農畜産物とみても大きな誤りはあるまい。いうまでもなく、食糧は人間にとって一日も欠かせないもので人間の存在すなわち食糧の存在でもある。食糧以外の諸々の物質の存在価値は、食糧あつてはじめて認められるものであろう。人間社会において食糧は絶対的なものであるから、これを評価すること自体おかしなことかもしれない。食糧すなわち農畜産物とみるならば、一日として欠かせない農畜産物を確保する方法が問題となる。農の起源で述べたように、自分の意志どおり確実に入手するには、自分の手許で、自分で生産することである。自分の意志が確実に反映できない恐れのある給源とか、途中の安全が保障し難い遠方からの供給には、リスクを伴うものである。リスクがあつては、食糧の確保とはならないのである。そして、農の本質に忠実であれば、他の資源とちがつて尽きることなく、食糧の永久生産が可能なのである。すなわち、食糧は農によつてはじめて確保できるということである。この認識は、農業評価に際し、常にその根底に据えておかなければならない大切なことである。

日本の必要とする食糧を全部自給することは、現実問題として至難である。しかし、農業の評価を食糧の生産供給に限つた場合、完全自給は別としても、少しでもそれに近づける努力は必要である。世界各国とも食糧生産に努めているが、特に先進諸国は商工業の発展にかかわらず、農業の振興、食糧の生産、確保に懸命で、食糧自給度の維持向上に努力していることに注目しなければならぬ。

アメリカの強さは、核よりも大陸間弾道弾よりも、大きな食糧供給力をもつ、豊かな農業にある。フランスのE・Cにおける強さも、一六〇—一七〇%という食糧自給率で

E・C各国に食糧を供給している、フランス農業の力によるものでなかるうか。

いまや、強国といえども、核を使うことはもちろん、派手な戦争に訴えることはできなくなり、食糧が核にとつて代りつつある。食糧が核以上の戦略物資として考えられるようになった現在、食糧を生産する農業については、改めて評価しなければならぬ。最近のドル問題、アメリカ貿易の赤字問題にからんで、アメリカ対日農産物輸出増加の強い要求は、核が使えない、色あせた対日軍事安全保障に代つて食糧の安全保障までアメリカの傘下に入れ、アメリカの意図どおり日本を従わしめようという考えに出たものではなかるうか。あるいは、すでに実質的には大量の対日食糧供給で食糧のアメリカの安全保障下にあるともいえる日本に対し、ゴリ押しをしてきたのかも知れない。

三、日本農業の現状

いままでも、農および農業についての基本的な考え方を述べてきたが、日本国民の必要とする農畜産物食糧を生産供給する立場にある日本の農業は、どのような姿になつていゝであらうか。

終戦後の食糧窮乏時代にアメリカが送り込んだ小麦粉は、飢をしのぐに役立ったが、その後現在にいたるまでのわが国の農業に至大の影響を及ぼした。すなわち、米が不足したため、代用としてやむなく我慢しながら食べた、小麦粉を材料とするパン食と、うどん、そば、ラーメンなどの麺食が、それまでの主食であった米の座に喰い込んでしまひ、その後、米の生産が回復して充分供給能力をもつようになった頃には、パン食を中心として変化した副食の影響も手伝つて、米の一人当り消費量は少なくなり、人口の増加にもかかわらず、米の全消費量まで減少するにいたつた。そして、現在の主食は、一日米が二食、小麦粉が一食、その小麦粉はほとんどすべて輸入によるので、日本人の主食の自給率は三分の二に過ぎない。つまり主食の米の生産が可能であるのに、米を食べないで外国産の小麦を食べている有様なのである。このようなことから米が生産過剰となり、在庫過多、財政負担増等の問題を生じ、ついには多額の助成金による水田休耕、稲作転換となり、これをめぐつて農政不信、情農発生となり、また、経済発展に伴つて生じた貿易自由化による国際農業への環境の変化などもあつて、わが国の農業はその根底から揺り動かされたのである。

一方、急速な商工業の発展に対し、自然の制約を受け、本質的に異なる農業はその生産性を急速には上げえないため、両者の生産性の差は大きくなっていくばかりで、こ

の生産性の違いと、経済発展による商、工業の労働需要は、農村人口のおびただしい流出となり、農業は衰退の途をたどるにいたった。そして、その対策として十年以上前から実施されてきた農業構造改善事業は、有力農家の経営大型化を進めたが、この事業に乗り切れない農家の離農、離村を促す結果となり、農村社会の維持が一層困難となり、そのことがさらに離農、離村につながる姿もみられる有様である。この農業、農村の衰退は、一口にいうならば、農業の将来に希望がもてないところに最大の理由があるともいえる。

以上のような経緯で、農家、農家人口、農用地面積、地力等はいずれも減少し、生産も減った結果、自給率を昭和三十五年と五十一年を対比すると、食用農産物の総合自給率八九%—七〇%、うち小麦三九%—四四%、大稈麦一〇七%—一〇%、大豆二八%—三%に落ち、さらに畜産物のカロリーをその飼料カロリーに置き換えたオリジナルカロリーでは、食用農産物の自給率は七八%から三〇%程度になったと見られている。このように農業の衰微した姿は、次の数字（一九七二年）で一層はつきりする。すなわち、国民一人当り農用地（耕地、草地）は僅かに六アールで、世界平均の二〇分の一、ヨーロッパ平均の八分の一以下、人口の多いインド、中国の五分の一—六分の一に過ぎない。また人口一人当り穀物生産量では、世界平均三五六瓩、ヨーロッパ四六七瓩、インド二〇四瓩、中国二七六瓩に対し、日本は一四四瓩に過ぎないのである。この有様では、生産という点からのみ考えても、日本の農業の現状は農業とはいえないばかりか、農を営むという部類にも入りかねる内容で、農家でいえば、三チャン農家、飯米農家、自給農家以下ともみることができであろう。少なくとも世界先進国中、最低の農業状況にあることを自覚しなければならぬ。

四、日本農業の進路

1. 農業の責任目標

すでに述べたように、農業とは食糧を生産自給し、その余剰を他に供給することが役割であるが、実際問題としては、世界の国々で、自然、経済、社会の条件も異なり、歴史、慣習もあるので、必要とする食糧の種類の手立てを自国で生産自給することは至難である。そこで、豊富に生産して、自給した余剰を他に供給できるもの、自給はおろか生産することさえむつかしく輸入に待たねばならないものなどを併せて、食糧全体としての総合自給率において自給が可能であることが望ましいこととなる。

これに対しわが国の現実には、人口多く、国土狭少、加えるに農耕地地少なく、さらに生活水準の向上につれて食生活が多様化しており、食糧の総合自給率においても僅か七〇%に過ぎないことはすでに述べたとおりである。狭い土地で、何も彼も生産しようとするれば、結局は、どれも自給できない半端なことに終る心配がある。また、世界の経済が発展し、交易、交通の発達した今日、有無相通じ、海外からの食糧を入手することも当然考えなければならぬ。そこで、農や農業の本義、本質、農業の評価を充分弁えたいわが国農業の役割なり、責任の範囲、目標を定めて、農業の果たさなければならぬ責任や目標を明確にする必要があると考える。たとえば、一つの考え方として、

- (一)、完全自給するもの 主食（米、麦）、野菜、牛乳、大豆、鶏卵等
- (二)、自給に努め、不足分は輸入するもの 豆類、いも類、果実、砂糖等
- (三)、輸入に依存するもの 肉類、乳製品等

もちろんこれは原則的なものであって、現実には、多少の弾力性をもつことになる。このように、憲法ともいえるべきはつきりとした日本農業の責任や目標に対し国を挙げて全力を尽くすならば、農業はその役割、責任を果たすことは可能であり、基本的食糧の自給も果たしうるのではなからうか。この場合大切なことは、生産自給できるならばいくらコストがかかってもよい、ということではなく、農の本質に背かぬ限り、及ぶ限りのコスト低下について格別の努力が必要なことである。食糧という人間にとって最も不可欠のものを供給する農業は、できるだけ安く生産することが、社会に対する責任でもあろう。

2. 原点 回帰

日本の農業の現状が、残念ながら衰退の途を進んでいることについては、すでに述べたところである。これに関し、農産物価格対策、構造改善対策、流通機構対策、農村生活のための地域計画、あるいは土づくり運動など数多の施策が打出されているが、いずれも場あたりのもののように思える。なぜ今日のような農業になったのか。その原因、理由を突きとめ、それとの取り組みのうえにたつたものではないようである。一口にしていえば、反省ということがないように思える。

たとえば、地力が落ちた原因は何か、輪作を無視しなかったか。化学肥料に依存しすぎたのではなかったか。ある作目の作付をふやすため、農業全体を考えないで奨励金を出したことはなかったか。目先の金銭収入に目をくらまされることはなかったか。農業

を商業的、工業的な感覚で考えたことはなかったか。生物を育てる喜びを自分から捨ててしまいはしなかったか。都会生活の上べだけを見て、農村生活の良さを忘れてはいなかったか。自分の経営のことだけにとらわれて、農村社会で大切な地域の連帯ということを考えなかったのではなからうか。焦りすぎたことはなか。資金さえ注ぎ込めば農業は良くなるように考えなかったか。農の本義、本質に悖ることはなかったか。等々。農政、行政担当者を含め、農民、農業団体、指導者、学者、研究者などすべての農業関係者は農業の原点に立ち帰って、虚心丹懷、真剣に考え直す必要があると思う。そして関係者の一致した基本認識の下に日本農業の基本方向を定め、農業の建直しをはかるならば、その確実に成果を期待できるに違いない。

3. 国土利用の新展開 農業関係者の中にさえ、日本の狭い国土では、食糧自給度を上げることは不可能と諦めている向きが少なくない。たしかに、農業は大地を利用しその上に展開するもので、土地を切り離しては考えられない。しかし、はなはだ狭いわが国の場合、農業の視点、農業の立場だけで、農用地を大幅に拡大しようとしても不可能であるばかりでなく、不合理でもある。広く国土の利用という観点から考えなければ、世間の理解は得られないであろう。

ごく大まかにみれば、現在、国土の七割近くの山地部を森林が占め、この森林率は世界に類のない高いもので、欧州諸国は二〇—三〇%程度、最高が森林国といわれるスウェーデンの五〇%である。残りの約三割ばかりの平地部に林業以外のすべての産業や、都市、住宅、交通運輸、教育、文化等々、あらゆるものが立地してはなはだ片寄った土地利用の姿となっているのである。そして、この平地部当りの人口密度は、西ドイツ、イギリス、オランダ、イタリヤの数倍、フランスの一〇倍強という稠密度である。狭い国土のうち、さらに限られた平地部に林業以外のあらゆるものが密集し、ひしめきあい、重なり合い、それぞれの分野の土地利用を主張しているのが、現実の土地利用の姿である。したがって、ある土地利用の分野を拡大しようとするれば、必然的に他の分野の土地利用の犠牲、すなわち圧縮を避けられないのである。この事情が今日の都市問題、住宅問題を始めとして、公害、環境汚染、自然破壊、食糧自給度、地下高騰など諸問題発生のも有力な根源になっているものと考ええる。そして、どの問題もごく限られた平地部を対象とする限り、まともな解決策、あるいは希望ある将来計画、構想を打出すこ

とは不可能に近い。そのため、各分野とも、処置なしとする諦めムードが拡がりつつあることを注目しなければならぬと思う。

さて、国土の約七割を占める森林は、過去における国全体としての森林に対する理解、認識の不足、それに基づく森林投資の過少のため、管理は不十分で成長率も思わしくない。森林には、木材生産という経済的機能のほかに、国土保全、水源涵養、空気浄化など大切な保全的機能があり、さらには自然環境という精神安定剂的働きもあるのであるが、そのいずれも生育旺盛で、よく繁茂した、立派な森林でこそ期待できるものである。わが国にも、投資を惜まず、管理無育に努めることによって、高成長率の立派な森林となっている事例は少なくない。森林に対する認識を改め、従前の何倍もの対森林投資をし、森林、林業に対する種々積極的施策を展開するならば、五〇年、一〇〇年の後には現在に勝る経済機能、保全機能をもつ立派な森林となりうるものと考ええる。

以上のような森林の整備充実を前提として、疎悪林、無立木地を中心に森林面積の思い切った縮少を図り、極度に片寄った国土利用を改めることによつて、森林自体も現より優れた森林機能をもつにいたり、森林以外の土地利用は大幅に緩和されて、今日的諸問題の解決に明るい希望がもてるようになるのではなからうか。

森林面積の縮少と平行してぜひ実現しなければならないことは、現在土地利用している各分野とも、新しい角度からその利用の効率化を図ることである。森林については先にふれたが、農用地でいえば、徹底した土地改良や水田裏作の実施と、土地生産力に相応しい作目の作付励行を期さなければならぬ。都市、住宅、工場などの用地では徹底した立体化によつて、効率的でゆとりのある利用が期待できよう。

ところで、森林面積をどれほど縮少するかは種々の見方があるが、仮りに、現在国土の七〇%の森林率を、世界的森林国スウェーデン並みの五〇%に縮少した場合を考えてみよう。森林以外の土地利用率三〇%に対し、新たに森林から振替えられる二〇%は約六割に当る。六割もの面積がふえるとなれば、それぞれの土地利用分野では初めて、理想とまではいかなくても、夢のある、実現の可能性に富んだ漸新な構想なり、基本方向を考え出すことができるであろう。

仮りに、農用地面積も六割程度、約三六〇万陌くらい増えたとすれば、農用地は全体で九六〇万陌、農用地率二五%くらいとなり、ようやく先進諸国の農用地率の半分程度

となる。そこで水田は米をフル生産して、主食は三食とも米とする（ただし一食は米飯でなく、ビーフン米を粉にして麵化したものとする）。これによって減った小麦の必要量と大、裸麦は、水田裏作の励行で面的には充足できるのであるが、麦類の一部は大豆や他の重要作物とともに、これらが適する畑には優先作付させることも必要となる。現在、平地部にある草地は、新しく利用をはかる山地部にふり替える。

以上は、農用地に関するごく大筋であつて、細い説明は省略するが、すでに述べた日本農業の責任と目標は、これによって達成可能と考える。もつとも、以上のような発想に基づく国土利用の新展開には、数十年から百年の年月を必要とするであらう。また、森林以外の分野が新に利用する山地部は、傾斜地であるから、その開発利用については、いままでの土地利用についての概念を払拭し、その方式、技術の開発に積極的に取組まなければならぬ。問題や難関は沢山あるであらうが、据え膳でできる大事業はない。日本の食糧対策、農業対策の前提としても、この国土利用の新展開は推進しなければならぬことと思ふ。

4. 食糧問題と米の消費拡大

先に述べたとおり、現在わが国民の主食は米（米飯）二食、小麦（パン又は麵類）一食で、主食の自給度は三分の二であり、このまま放置すれば一層米の消費は減り、小麦の消費はふえ、主食の自給度は更に低下するおそれがある。

農の原義、農業の役割からみて、主食の自給は何を措いても確保すべきもので、いわんや自給に足る能力も、現に有り余る現物の米を抱えていながら生産を減らし、庫にある米をもて余しものとして利用せず、輸入食糧で補うとは、なんとしても納得しかねるところである。このことは、米の生産過剰、作付制限、在庫米増加などの問題に加えて、農業そのものについての疑義、意欲喪失、農政不信、農業農村の衰退等、農業をとりまく種々の問題に絡んでいゝ。しかし以上の諸問題は、米の消費拡大によって大部分は解決できるのである。

米の消費拡大のためには、いろいろな用途で工夫しなければならぬが、主食として消費すれば量的にまともな効果は大きい。われわれはつい二、三十年前まで、三食とも主食は米であつた。三食米が実現すれば、前記諸問題は解決し農業、農村は見違えるような活気と明るさをとり戻すであらう。水田を始め、米を作るためのあらゆる施設、機

具は整っているし技術もあり、これらを活用できることは最も合理的なことである。

ところで、米三食のうち、二食は米飯としても、現代の社会風潮から、あと一食はパン化か麵化が望ましい。パン化も大いに研究に値するが、小麦の代用品視されることは避けられない。麵化については、米を主食とする南支那、台湾などで昔から利用されてきたビーフンがある。ビーフンは米を粉とし、煉って、細いそう麵状にしたもので、調理法としては、焼ビーフン（焼そばに似ている）と汁ビーフン（ラーメンに似ている）とあつて、どちらも肉、魚介、野菜などを具として加えるので、食事としての栄養的な調整は容易である。日本人の嗜好に適し、彼方で一度味わった者には忘れかねるものであり、学校給食にも手がからず好適すると思われる。

原料米については、もともと南支や台湾の粘り気のない米で製造しているもので、わが国では、北海道米や府県産の米でも古米や古々米の方が向くものと考えられる。

製造については、ビーフンとして南支、台湾からの輸入があるほか、国内でもすでに二、三の工場で生産されている。原料米の品質との関係で多少の研究は必要かもしれないが、工程は簡単であらうから、米の主産地毎に粉殻を燃料とするビーフン工場を設置すれば、農村工業としても恰好のものとならう。

ビーフンを主食とするためには、マスコミ、料理学校、講習会などを使って根気よくそのP・Rに努める必要がある。各家庭で利用するほか、食堂、そばや、ラーメン屋などで提供することにならうが、学校給食用に最も期待できよう。インスタント・ビーフン、カップ・ビーフンの製造も容易と思ふ。戦後、嫌々食べたパンや麵類が三〇年近くたって定着したことを考えると、ビーフンについてもその可能性があると信ずるものである。

（元・kk北海道開発コンサルタント顧問）